

## ● 審査委員特別賞 ●

### 自分たちの心で

みやもと あい  
宮元 亜衣



ぎょくりゅう  
鹿児島市立鹿児島玉龍中学校3年(鹿児島県)

私たち日本人にとって大切な、日本固有の領土でありながら、そこに日本人は誰一人として住んでいない北方領土。第二次世界大戦後、ソ連に占拠され、それが今も続いています。住んでいるのはロシア人を始めとする外国人。日本人として返還に向けて一致団結したいところですが、踏み止まってしまう自分がいます。きっと、このように話す現島民がいるからでしょう。「一生ここで暮らしたい」「ここが私たちの故郷」。こんな声がある中で「北方領土を返せ」と言い張ってしまえば、現島民が思い出を重ねてきた大切な故郷が全てなくなってしまうのではないか。そんな思いが頭をよぎりました。故郷に後悔を残してきた元島民の方の胸の痛みを私は知っています。だから、現島民にも元島民にも絶対に心を痛めてほしくない。そのために、私たち一人一人ができること。そこには、沖縄県から学べるものがあると思います。

沖縄は戦時中、アメリカ軍に占拠されたものの、1972年、日本に返還されました。しかし、沖縄には日米間の問題がまだまだ色濃く影を落としています。そしてなかなか解決に至らない。そんな現状に沖縄県民は、全国民が当事者意識を持つべきだと声を上げています。私たちは無意識のうちに、残されている問題をそこにいる人に任せっきりしているのかもしれない。

そして、この「当事者意識」。きっと北方領土問題の解決に向けても鍵になると思うのです。鹿児島に住んでいる私は、北方領土に対して「遠い存在」というイメージがあると感じるからです。お互い正反対の位置にあり、気候も全く異なっています。ただ、それだけで「遠い存在」と感じ

てしまうのなら、「近い存在」に感じることに、つまり、当事者意識を持つことは決して難しくないはずです。元島民が笑顔で故郷に戻れるように私たちが北方領土について調べたり、考えたりするだけでも当事者意識を持つことにつながるはずです。

そして、北方領土問題の解決と大きくかかわる「現島人と元島民の共生」。日本と異なる文化を持つ、さまざまな人がともに暮らすことになるかもしれません。そんな中で最も大切なのが、心で接することです。絶対に差別があってははいけません。ある女性を知ったことが、私に強くこう思わせてくれました。彼女はアイヌ民族の方でした。アイヌ民族は江戸、明治時代に住む場所や文化を奪われた日本の先住民族です。彼女自身、北海道で「土人」と差別を受け、本土では子どもたちが「外国人みたい」といじめを受けました。衝撃的でした。民族や見た目が違う、ただそれだけで受ける周囲からの血の通わない対応。同じ人間同士、心で接することができなかつたのかと腹立たしさを感じます。じっくり時間をかけてでも、相手と心で寛容に接することが幸せな民族同士、島民同士、そして人と人の共生につながるはずです。

沖縄の日米間の問題とアイヌ民族。そして、北方領土。一見、日本が抱えるばらばらの問題。でも、実はお互いがつながっています。そして、私たち一人一人の小さな力がどれほど奥深い。だからこそ、それが集まったとき、より力強いものになると思うのです。これらは私たちの大事な祖国、日本の話です。私たちが考え続け、伝え続けていかなければいけないのです。それが私の使命です。